高齢者の生活意識と衣服環境
—性差について—

田岡洋子・髙森　壽*・井澤尚子**・斎藤祥子***
椋梨純枝*4・青木迪佳*5・髙木くに子*6

京都短期大学・熊本大学*・東京家政学院短期大学**・北海道教育大学***
宇部フロンティア大学短期大学部*4・県立長崎シーボルト大学*5・元中京短期大学*6

Living Consciousness and the Clothing Environment among Senior Citizens.
— On the Sex-differentiated —

＊要旨　高齢者の生活意識と衣服環境についての調査を2001年10～11月に北海道から九州の８地域に居住する元気な高齢者（男性282名、女性810名、計1,092名）を対象に質問紙調査法を用いて行い、有効回収率93.7％であった。「生活意識」は健康を心配し、健康維持のために食べることを男性53.5％、女性62.7％が注意し、楽しいのは人と接することであり、おしゃれ感のある男性51.4％、女性83.0％であった。服装については男性46.5％、女性66.7％がおしゃれ感をもち、着用時の第一留意点は「足もとには履きやすいもの」で、因子分析では自己表現・調和・実用性・着心地に女性が高得点で、男性は規範性に高得点であった。「望ましい高齢者衣服のイメージ」は暖かく・ゆったりした・上品な・明るいが上位で、因子分析では男性が親しみやすさ・活動性に、女性は容儀性・ファッション性に高得点であった。生活意識から見ると女性が暮らしの工夫をし、おしゃれ感、望ましい高齢者衣服のイメージには性差が見られた。

キーワード　living consciousness 生活意識, clothing environment 衣服環境, aging society 高齢社会, personal adornment おしゃれ, hints on dressing 着用時の留意点, desirable image of elderly clothes 望ましい高齢者衣服のイメージ

1．緒　　言

日本は、1994（平成６）年に高齢者（65歳以上）人口が全人口の14％を超えて本格的な高齢社会に突入した[1)]。総務省「国勢調査」人口問題研究所「日本の将来推計人口」（2002年１月）によると2020年には27.8％、2050年には35.7％になると見込まれている[1)]。一概に高齢者といっても、健康状態によって同じように考えることはできない。厚生白書（平成11年）等のデータによれば[2)]、65歳以上の高齢者中、介護を必要とする高齢者は、70代までは非常に少ないことが分かる。さらに、70代後半の高齢者でも、80％以上がいわゆる「元気な高齢者」であることから、自立した生活を送ることができる高齢者が多く存在すると考えられる。

人間生活において、衣・食・住は基本的要素であるが、中でも衣生活は、衣服の着脱行為を

受理：2006年１月18日（成美学会）

中心とした人間特有の文化であり、衣服は人間と生活空間との間に存在する、最も身近な環境である。衣服には寒暑や外界の刺激から身体を保護したり、汗や汚垢を吸収し皮膚の衛生を保つ物理的機能がある一方、重要なものに精神的機能がある。衣服を工夫し装うことの中に充実感を見出し、装うことにより自己を表現しようとすることは、生きる意欲を高め、精神の活性化をも起こすと考えられる[3)]。現在、日本ではほとんどの人が既製服を着用しているが、これらのデザインは若者を対象としたものが主流であり、高齢者に配慮したデザインやサイズは少ないように考えられる。

本研究は、北海道から九州に至る8地域に居住する、自立生活のできる高齢者を対象に生活意識と衣服環境についての調査を実施し、高齢社会に対応した安全で快適な衣服についての基礎資料を得ることを目的とした。

2．方　法

(1) 調査時期、調査対象及び調査方法

調査は、2001年10～11月に、北海道、東北、関東、中部、関西、中国、四国及び九州地区に居住する生活の自立した元気な高齢者を対象に、質問紙調査法を用いて行った。有効回収数1,092票、有効回収率93.7%であった。分析に用いた調査対象者の内訳を表1に示す。

(2) 調査枠組及び調査内容

予備調査として資格修得間近な介護福祉士

表1　基本属性と生活形態

基本属性		人数(%) 男性	人数(%) 女性	T検定有意確率
性別		282(100.0)	810(100.0)	
年齢	60才代	102(36.2)	330(40.7)	
	70才代	123(43.6)	305(37.7)	
	80才代	57(20.2)	175(21.6)	
世帯	一人暮らし	49(17.4)	234(28.9)	***
	夫婦のみ	125(44.3)	251(31.0)	***
	他と同居	108(38.3)	324(40.0)	
	無回答		1(0.1)	
居住地域	北海道	29(10.3)	80(9.9)	
	東北	19(6.7)	81(10.0)	
	関東	26(9.2)	80(9.9)	
	中部	76(27.0)	160(19.8)	
	近畿	39(13.8)	113(14.0)	
	中国		101(12.5)	
	四国	28(9.9)	40(4.9)	
	九州	65(23.0)	155(19.1)	

生活形態		男性	女性	有意確率
居住形態	一戸建て	213(75.5)	584(72.1)	
	集合住宅	29(10.3)	120(14.8)	*
	その他	40(14.5)	105(13.0)	
	無回答		1(0.1)	
生活様式	和室生活	216(76.6)	603(74.4)	
	洋間生活	62(22.0)	201(24.8)	
	和洋生活	2(0.7)	4(0.5)	
	無回答	2(0.7)	2(0.2)	
就寝形態	ベット使用	101(35.8)	356(44.0)	*
	布団使用	179(63.5)	451(55.7)	*
	無回答	2(0.7)	3(0.4)	
職業経験	有り	282(100.0)	668(82.5)	
	無し		142(17.5)	

* $p<0.05$　** $p<0.01$　*** $p<0.001$

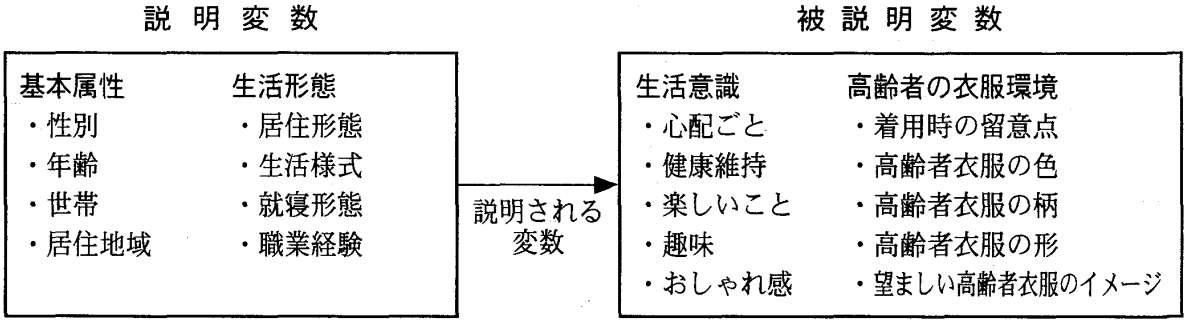

図1　調査枠組

や経験豊かな社会人に対する訪問介護員養成講座などでの調査結果及び高齢者の衣生活に関する既往の研究[4) 5) 6) 7)]を参考に本調査内容を決めた。

さらに自分の生活に対する意識は生活環境や衣服などに対する考え方と関連すると考え、図1の調査枠組を作成し、調査項目を設定した。主な調査内容は①基本属性（性別・年齢・世帯・居住地域）②生活形態（居住形態・生活様式・就寝形態・職業経験）③生活意識（日常生活における関心事・趣味・おしゃれ感）④高齢者が考える衣服環境についてである。これらの調査内容は質問項目16からなる調査票を作成し、本調査の統計処理には、SPSS vol. 10を用いた。なお、今回は性差についてのみ記す。

3．結果と考察

(1) 調査対象者の概要

調査対象者の内訳を表1に示す。

居住形態は7割以上の男女が一戸建てに住み、集合住宅は男性1割、女性1割半と女性が多い。生活様式は7割半の人が和室生活をし、洋間生活をしているのは女性が24.8%で、男性よりは暮らしの工夫をしている。高齢者独特の体型に変化し、日本の伝統である畳み生活をするより、イス生活の方が暮らしやすいと考える。就寝形態は女性が1割多くベッドの使用があり、洋間生活者が2割強であるのに比べてベッド使用は4割と多く、2割の人が畳みの上にベッドを設置していると思われる。高齢者にとっては布団のあげおろしは重労働で、腰や膝への負担を少なくするにはベッドがよいと考える。職業も生活の大きな要素で、以前には農業に従事していた男性の8割弱であったが、高齢の今は1割が現役で農業をされている。以前の職業として、他には公務員3割弱、製造業2割弱などで、現在は無職7割と高齢のために退職している。女性の以前の職業としては専業主婦3割弱、サービス業1割にとどまり、今は無職7割弱である。また、職業経験の無い女性は2割であった。

(2) 生活意識

高齢者の生活意識を明らかにするため、①今、心配していること。②健康維持のために注意していること。③今、楽しいこと。④趣味。⑤おしゃれへの関心について回答を求めた。その結果は表2に示す。「今、一番心配していることは何か」についての回答では8割の人が健康について心配し、次に男性は経済のこと、女性は家族のことを心配していた。「健康維持のために注意していること」についてはストレスをためないことは女性が1割多く、睡眠を充分とるも4割前後と多い。食べる事については男性5割、女性6割で半数以上の人が生活の基本である食べ物に対して注意をしている。高齢者にとって食生活は、大きく二つの意味を持っている。一つは栄養素を摂取すること、もう一つは生活の中での楽しみである。食生活の重要性はすべての世代に共通であるが、特に高齢期においては、食欲が低下し、消化吸収機能も衰える。この様な点を考えて適切な栄養素をバランスよく適量摂取することが、健康を維持するために重要である[9]と考えられ、本研究において食べることに注意する被験者が多かったことは健康維持のためには望ましい傾

表2　生活意識

生活意識		人数(%) 男性	人数(%) 女性	X^2検定 有意確率
心配ごと(複数回答)	健康	218(77.3)	687(84.8)	
	家族の事	41(14.5)	132(16.3)	
	経済	49(17.4)	73(9.0)	
	近所付合い	1(0.4)	13(1.6)	
	友達付合い	7(2.5)	29(3.6)	
	その他	14(5.0)	28(3.5)	
健康維持(複数回答)	食べ物	151(53.5)	508(62.7)	
	運動	136(48.2)	316(39.0)	
	睡眠を充分とる	111(39.4)	362(44.7)	
	ストレスをためない	68(24.1)	300(37.0)	
	その他	15(5.3)	35(4.3)	
楽しいこと(複数回答)	人と接する事	122(43.3)	509(62.8)	
	運動する事	73(25.9)	128(15.8)	
	寝る事	25(8.9)	83(10.2)	
	食べる事	61(21.6)	193(23.8)	
	その他	48(17.0)	85(10.5)	
外出(趣味)	外出好き	177(62.8)	612(75.6)	**
	嫌い	19(6.7)	29(3.6)	
	どちらでもない	86(30.5)	169(20.9)	
	無回答			
旅行(趣味)	旅行好き	183(64.9)	624(77.0)	**
	嫌い	22(7.8)	35(4.3)	
	どちらでもない	77(27.3)	151(18.6)	
	無回答			
継続趣味	有り	185(65.6)	501(61.9)	
	無し	94(33.3)	292(36.0)	
	無回答	3(1.1)	17(2.1)	
おしゃれ感	有り	145(51.4)	672(83.0)	**
	無し	137(48.6)	134(16.5)	
	無回答		4(0.5)	
おしゃれ(複数回答)	化粧	2(0.7)	212(26.2)	
	ヘアースタイル	24(8.5)	283(34.9)	
	服装	131(46.5)	540(66.7)	
	小物	9(3.2)	62(7.7)	
	アクセサリー	5(1.8)	123(15.2)	
	履き物	21(7.4)	95(11.7)	
	その他	4(1.4)	10(1.2)	

** $p<0.01$

向である。しかし、男性の場合、食べる事に注意する者の割合が約半数に止まっていることは憂慮される。運動については男性は１割多く注意をしていた。

また、「今、一番楽しいこと」については、人と接することが、男性４割女性６割と多くの人が楽しいとの回答を得た。女性のその傾向は２割多い。これらの楽しみにも外出が問題になると考え、「外出はお好きですか？」では、好き・嫌い・どちらでもないの３項目から１項目の回答を得た。女性は７割半、男性は６割の人が外出が好きという回答であった。X^2検定の結果、有意差が認められた。嫌いという意見は男性７％、女性４％とわずかであった。これらの外出に対する回答は高齢者にとっては良い傾向である。なお、「外出」より「旅行」は計画性や経済的な負担が必要だが、好きが男性６割半、女性８割弱と外出より少し多い、これもX^2検定の結果、有意差が認められた。嫌いは男性８％、女性４％で外出より１％多い。外出、旅行ともに女性が好きと回答した者が多かった。

外出や旅行には日常(ケ)と異なるハレの気持ち(緊張感)やおしゃれに心を配ることがある、この気持ちを持つことが変化のある、よりよい生活ができる要因と考えることができる。この裏付けとして男性の５割、女性の８割がおしゃれ感があると回答している。X^2検定の結果、有意差が認められた。男性に比べて、やはり女性独特の生きがい活動になると考える。どのようなことに「おしゃれ感」があるのか表２に示す。７項目の中から重複回答を求めた。その結果、ヘアースタイルは女性３割半、男性１割弱と少なく、服装については一番多く男性５割、女性７割と気を遣いおしゃれをしているのは良い傾向である。しかし、男性が服装以外の項目については１割以内であるのに対し、女性のおしゃれ関心事項は多岐にわたっていた。服装に関心が高いことは、心理面に与える影響が大きい。特に女性の場合は臭覚、視覚、触覚を動員した化粧行為は、心身の活性化に有効であるといわれている[10)]。これらの事項について女性の意識が高かったことは健康で、長生きすることに繋がると考える。

現在、生活の中で続けている趣味の有無について回答を得た。その結果、続けている趣味が有ると６割以上の人が答えたが、X^2検定の結果、継続趣味の有無に関しては男女間に有意差は認められなかった。これらの調査から楽しく生活し、よりよい環境のもとで、趣味は生きがいの一つになっていると考えられる。

(3) 着用時の留意点

日常着を着用する時にどんな点について気をつけているか、25項目に対して５件法で評価を求めた。「とても気をつけている」を５点とし、「気をつけている」４点「どちらでもない」３点「気をつけていない」２点「全く気をつけていない」を１点として、各項目について平均値を求め、図２に示す。評定平均値の高い留意項目は「足もとには履きやすいもの」「肌ざわりがよく軽くて柔らかいもの」で、女性の次点は「色・柄・デザインが気に入ったもの」男性の

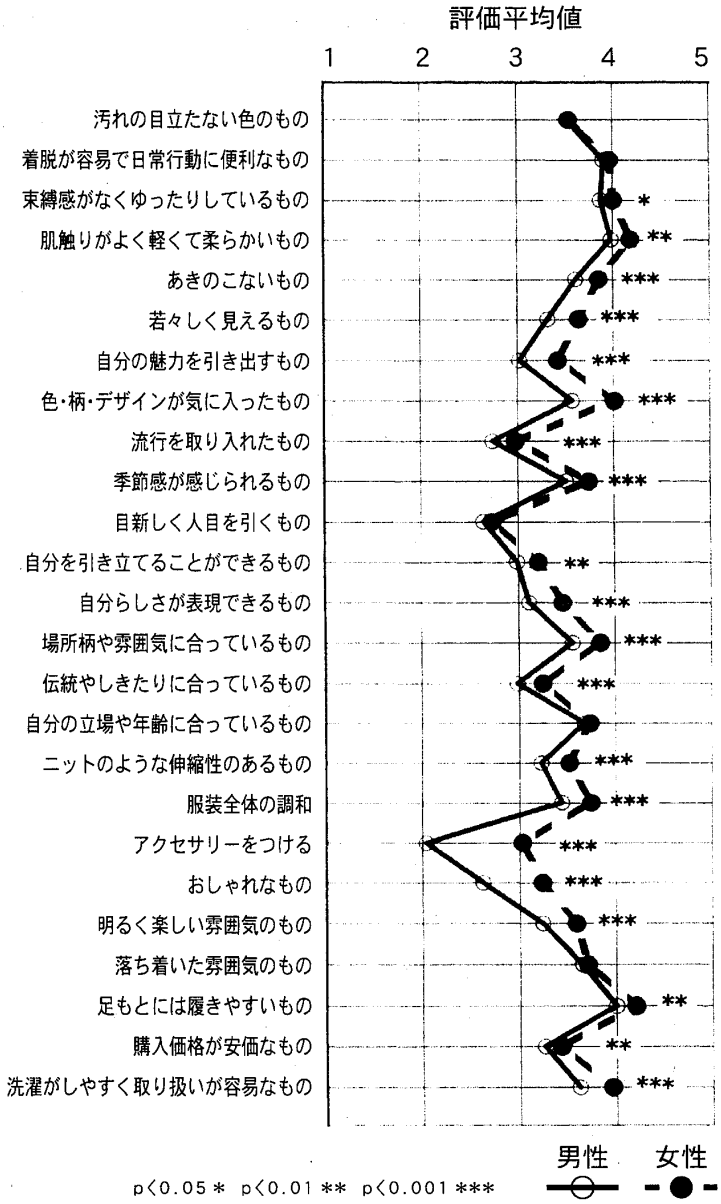

図２　日常着の着用上の留意項目の評価平均値

次点は「束縛感がなく、ゆったりしているもの」である。高齢ゆえに安全面に留意し、男性は安楽面にも留意しているが、女性はおしゃれ感に留意している。母平均の差の検定結果では25項目中20項目に有意差が認められた。

これらの項目について主因子法による因子分析（バリマックス回転）を行った結果を表３に示す。固有値１以上で５因子が抽出され、各因子の高い因子負荷量をもとに第１因子「自己表現」第２因子「着心地」第３因子「調和」第４因子「規範性」第５因子「実用性」とし、累積寄与率47.18％であった。なお、因子得点を求めて、図３に示す。女性は「自己表現」「調和」「実用性」「着心地」に、男性は「規範性」に高い因子得点が得られた。しかし、着心地や規範性につい

表３　日常着の着用上の留意項目　因子分析結果

因子	項　　目	因子負荷量	因子の意味	因子寄与率
1	自分の魅力を引き出すもの	0.759	自己表現	21.25
	自分を引き立てることができるもの	0.748		
	おしゃれなもの	0.710		
	流行を取り入れたもの	0.710		
	若々しく見えるもの	0.685		
	目新しく人目を引くもの	0.670		
	自分らしさが表現できるもの	0.660		
	ｱｸｾｻﾘｰをつける	0.614		
	色・柄・デザインが気に入ったもの	0.541		
	明るく楽しい雰囲気のもの	0.514		
2	着脱が容易で日常行動に便利なもの	0.711	着心地	9.12
	束縛感がなくゆったりしているもの	0.668		
	肌ざわりがよく軽くて柔らかいもの	0.632		
	汚れの目立たない色のもの	0.460		
	あきのこないもの	0.439		
	ニットのような伸縮性のあるもの	0.286		
3	服装全体の調和	0.492	調和	7.82
	足もとには履きやすいもの	0.472		
	季節感が感じられるもの	0.443		
	落ち着いた雰囲気のもの	0.409		
4	自分の立場や年齢に合っているもの	0.505	規範性	4.89
	伝統やしきたりに合っているもの	0.489		
	場所柄や雰囲気に合っているもの	0.487		
5	洗濯がしやすく取り扱いが容易なもの	0.680	実用性	4.10
	購入価格が安価なもの	0.552		
			累積寄与率(%)	47.18

ては、男女間の因子得点は近似していた。このように因子には性差のあるものとないものがあることが分かった。

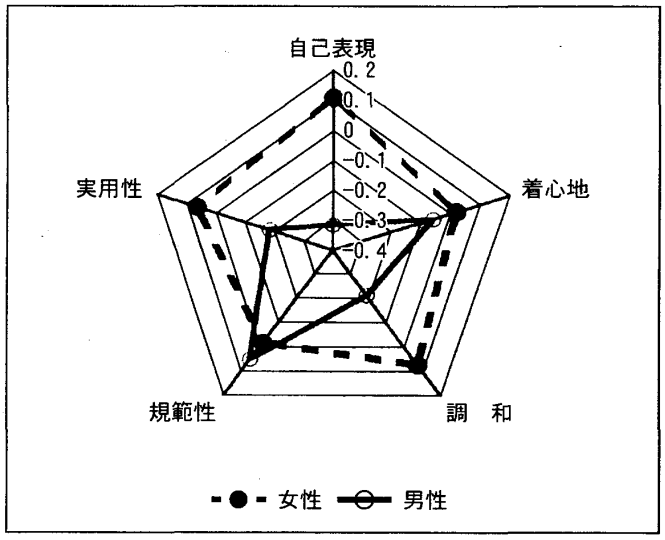

図３　日常着の着用時の留意因子　因子得点

（4）高齢服の色と柄

着用している色は高齢者自身が良い、好きと考えて使用していると考え、複数回答を得た。男女間で出現率の差が大きかったのは男性に多い紺・灰・白色で、女性に多いエンジ・赤・黒・紫・赤紫・ベージュ系で、茶系は３割半と同じであった。紺色は日本人にとって好みの色であり、高齢者が嫌う色の代

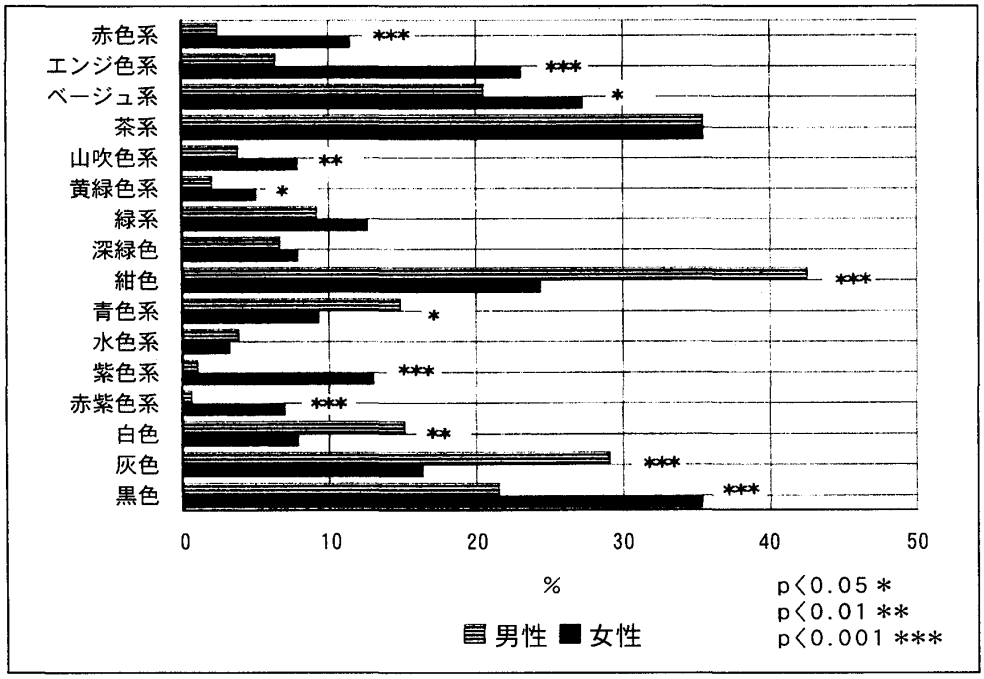

図4　着用服の色

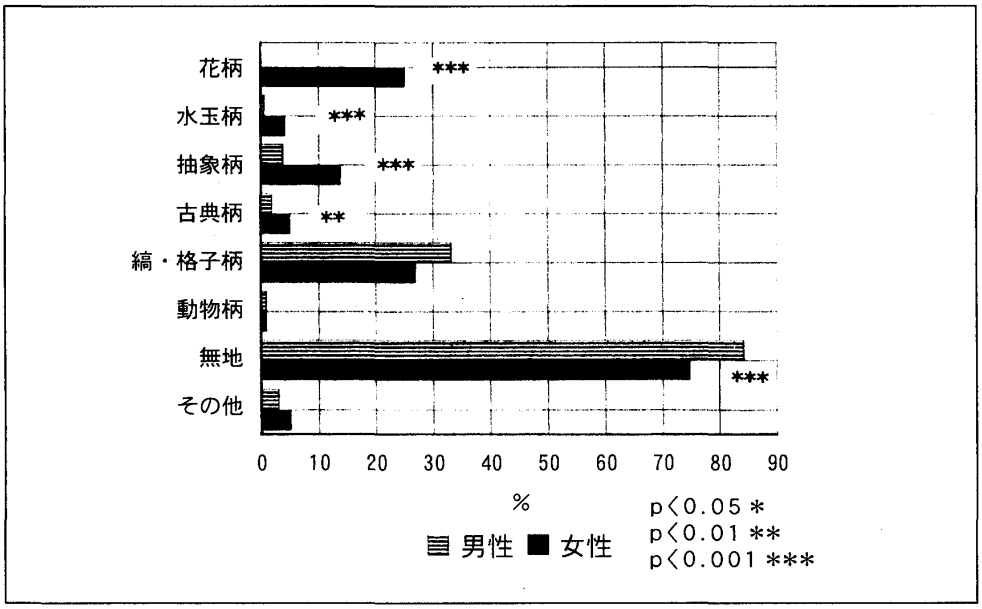

図5　着用服の柄

表である黒色は男性２割、女性３割半の使用で、母平均の差の検定の結果では16色系の中12色系に有意差が認められた。黒色は先行研究より好まれない色[11]ではあるが、配色に便利であり、汚れが目立たないということから黒・灰色が使用される傾向にある。

また、柄については８割が無地を好み、縞・格子は３割前後で、男性の多くが着用している。花柄は女性のみの着用で２割半であった。母平均の差の検定の結果では７柄中５柄に有意差が認められた。

（5） 高齢服の形態

高齢者が着用している下衣はズボンが７割を示し、女性のスカートは２割半と少なく、機能性を重要視している。上衣については多用であるが、ブラウスで女性４割弱。ジャンパーは男性４割。セーターは男性２割、女性４割半。カーディガン男性１割、女性３割。ポロシャツ男性３割、女性１割であった。男性に多いのはジャンパー、ポロシャツで、女性はブラウス、カーディガン、セーターであった。母平均の差の検定の結果では19アイテム中12アイテムに有意差があり、セーター、カーディガン、ポロシャツなどは性差のないアイテムと考えていたが差があり、Ｔシャツ、ジーパンは少数ではあるが、性差のないアイテムであることが分かった。

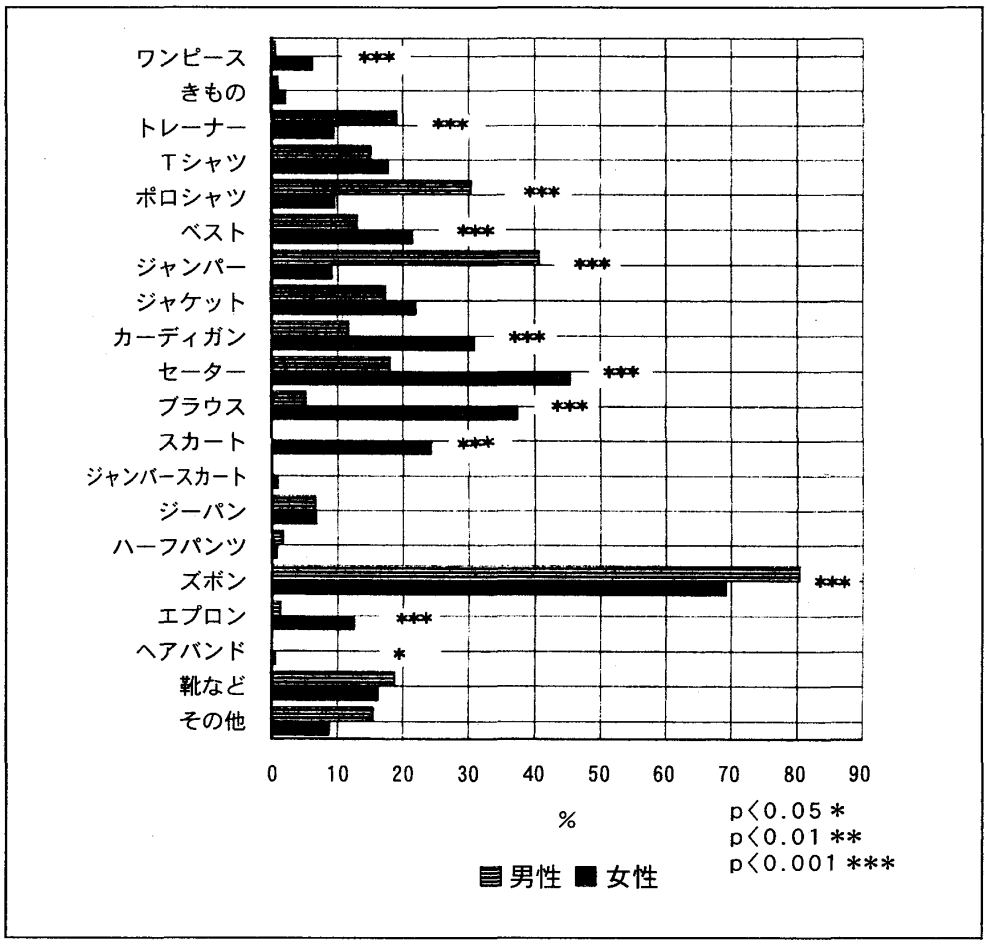

図６ 着用服の形態

(6) 望ましい高齢者衣服のイメージ

高齢者の衣服として望ましいイメージは何かを16の形容詞対について提示し、被験者の考えが「Aの方」「ややAの方」「どちらともいえない」「ややBの方」「Bの方」の5段階評価を求めた。その結果のイメージプロフィールを、図7に示す。高齢者が求める服のイメージは男女ともほぼ類似傾向にある。男性のイメージ評価平均値の高いものは「暖かい」「大人っぽい」「きちんとした」「親しみやすい」「ゆったりした」「明るい」「上品な」「やわらかい」「気軽な」「落ちついた」「シンプルな」「スポーティな」の順である。女性は「暖かい」「ゆったりした」「上品な」「明るい」「親しみやすい」「気軽な」「やわらかい」「きちんとした」「大人っぽい」「シンプルな」「落ちついた」の順である。母平均の差の検定結果では18項目中8項目に男女間に有意差が認められた。

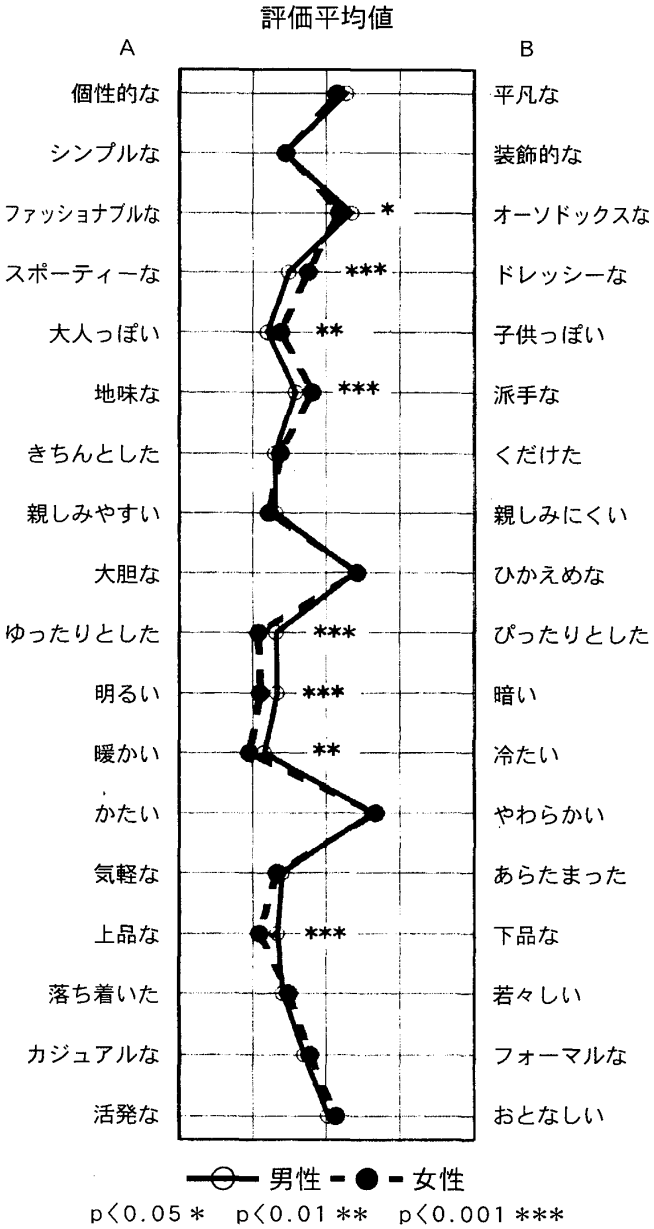

図7　望ましい高齢者衣服のイメージプロフィール

これらの項目について主因子法による因子分析を行った結果を表4に示す。固有値1以上で4因子が抽出され、各因子の因子負荷量をもとに第1因子「親しみやすさ」第2因子「ファッション性」第3因子「活動性」第4因子「容儀性」と命名し、累積寄与率38.7%であった。男女別に因子得点を求めて、図8に示す。男性は親しみやすさと活動性に、女性は容儀性とファッ

表４　望ましい高齢者衣服のイメージ　因子分析結果

因子	項　　目	因子負荷量	因子の意味	因子寄与率
1	暖かい／冷たい	0.718	親しみやすさ	15.98
	親しみやすい／親しみにくい	0.698		
	明るい／暗い	0.598		
	ゆったりした／ぴったりとした	0.573		
	上品な／下品な	0.573		
	気軽な／あらたまった	0.565		
	大人っぽい／子供っぽい	0.496		
	落ちついた／若々しい	0.411		
	シンプルな／装飾的な	0.381		
2	大胆な／ひかえめな	0.531	ファッション性	8.25
	個性的な／平凡な	0.492		
	地味な／派手な	-0.488		
	活発な／おとなしい	0.474		
	ファッショナブルな／オーソドックスな	0.409		
3	スポーティな／ドレッシィな	0.538	活動性	7.97
	カジュアルな／フォーマルな	0.435		
4	きちんとした／くだけた	0.459	容儀性	7.39
	かたい／やわらかい	0.294		
			累積寄与率(%)	38.70

ション性に高得点を得て、性差があり、求めるイメージが異なっていることが分かった。

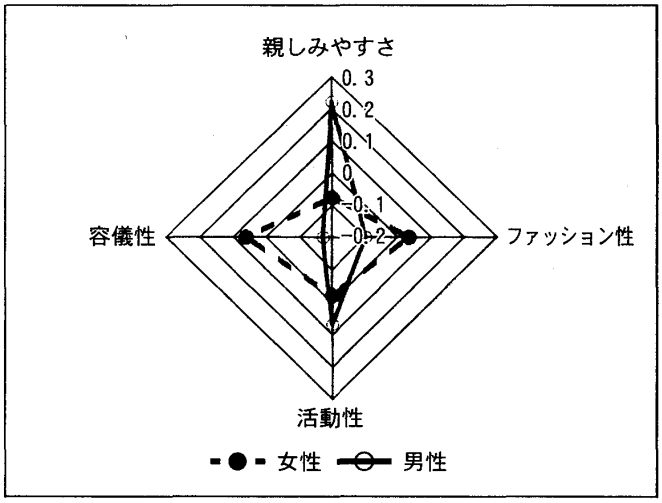

図８　望ましい高齢者衣服のイメージ　因子得点

４．まとめ

１）世帯については男性の一人暮らしは女性より少なく、女性の方が暮らしの工夫をよくし、ベッド使用も男性より１割多い。

２）生活意識では健康を心配し、健康維持のために食べ物に注意をしている男性５割、女性６割以上であった。

３）生活環境をよりよくしたり、生きがいになるおしゃれ感の有るのは女性８割、男性５割と性差が見られ、特に服装についてのおしゃれ感が多く、男性５割、女性７割であった。

４）高齢者の着用留意点25項目中20項目について見ると、母平均の差の検定結果では性差が見られ、その項目について因子分析し、因子得点では男性の規範性に、女性の自己表現、着

心地、調和、実用性に高得点で、男女による留意点の異なることが分かった。

5）高齢服の色は男性は紺色、青色系、白、灰色などが高く、赤色系、エンジ色系、紫色系は女性が着用していた。また、無地柄がよく、女性では花柄、水玉柄などが好まれた。

6）高齢服の形態は男性がよいとしているのはジャンパー、ポロシャツ、トレーナーなどで、女性はカーディガン、セーター、ブラウスなど、ズボンは両者とも多く着用していた。

7）望ましい高齢服のイメージについては暖かく、ゆったりした、上品で明るい、大人っぽく、親しみやすく、きちんとし、気軽でやわらかく、シンプルな、落ちついた、ものがよく。因子分析後の因子得点は男性が親しみやすさ、活動性で、女性は容儀性、ファッション性に因子得点が高かった。

以上のように、生活意識から見たときには女性の方が暮らしの工夫をし、おしゃれ感に性差があり、望ましい高齢者衣服のイメージも異なることが分かった。

なお、この研究は(社)日本家政学会　色彩・意匠学部会の共同研究として進め、全国大会で報告したものをまとめた。

〈参考文献〉

1）内閣府「国民生活白書（平成13年度)」㈱ぎょうせい（2002）25

2）厚生省「厚生白書（平成11年版)」財務省印刷局（1999）168-173

3）見寺貞子「ファッションにおけるユニバーサルデザイン－高齢者・障害者のためのファッションショーの企画と評価－」繊維機械学会誌 53(6)（2000）244-253

4）中川早苗「高齢者の衣生活と衣服ニーズ－施設居住高齢者の生活に関する学際的研究の報告－」奈良女子大学生活環境学部　1994年3月

5）見寺貞子「ファッションにおけるバリアフリーデザインに関する研究－高齢者・障害をもつ人の意識に基づくデザイン要素の提案－」神戸芸術大学紀要芸術工学′99（1999）68-81

6）小林茂雄「老人ホームにおける衣生活とおしゃれ行動」繊維機械学会誌53(6)（2000）229-236

7）岡田宣子「高齢者の衣生活行動の現状と要望点－被服の調達と選択行動を中心として－」日本家政学会誌 51(7)（2000）595-603

8）厚生省「厚生白書（平成12年版)」財務省印刷局（2000）19・27

9）厚生省「厚生白書（平成12年版)」財務省印刷局（2000）76

10）厚生省「厚生白書（平成12年版)」財務省印刷局（2000）82

11）田岡洋子「イラストでわかる生活・色彩」新風書房(2000）77・78